

古布の銀河

青海ナミ

指をよじり
息をしずかに
まるで小さい灯りをともすように
糸は針にとおされてきた
雨の日や風の日から
体を丈夫に守るために
生きていくために
日々を暮らすために
針の少し先に宿る
昼と夜が
くぐりぬける
降りそそぐ
時の仕立ての前に